

# ベートーヴェン／ミサ曲ハ長調 作品 86

ベートーヴェンのミサ曲ハ長調は敬虔で美しいミサ曲です。ベートーヴェンの「傑作の森」と呼ばれている時期（1807年）に完成されたこの曲は、晩年の「ミサ・ソレムニス」が余りにも有名な為、ほとんど知られていません。しかしこの曲は、ふくよかで優しい感情と充実した音楽が融合したベートーヴェンの作品の中でも屈指の名曲です。

## I. キリエ

ベートーヴェンにしては珍しいテンポの指示です。ハ長調で「キリエ エレイソン（主よ、あわれみたまえ）」と穏やかに美しくミサ曲が開始されます。

## II. グローリア

オーケストラとコーラスが力強く「グローリア」と神を賛美し、ハ長調に変わってテナーとコーラスが感謝の歌を歌います。中間部はテンポが遅くなり、ハ長調でアルト・ソロが「クイ・トーリス・ペカタ・ムンディ（世の罪を除きたもう主よ）」と祈りの歌を捧げます。静かで美しい音楽です。3部はハ長調に戻り「クオニウム・トウ・ソルス・サンクトゥス（主のみ聖なり）」の迫力あるフーガが展開され、力強い「アーメン」のコーラスで終わります。

## III. クレド

チェロとファゴットの弱音から始まります。一般的なミサ曲では力強く信仰告白を行う部分ですが、ベートーヴェンの音楽は大きく異なります。弱音の中でテキスト

が明瞭に歌われます。中間部ではアダージョ変ハ長調となり、聖書によるマリアの受胎とキリストの受難が敬虔に歌われます。「ポンテオ・ピラトのもとで苦しみを受け」という部分でさらに音量を落として、その次に受難にあたる「パッサス」という言葉が表情を変えて繰返されます。ベートーヴェンらしい迫力のある表現です。第3部はハ長調になり、バスのソロによるキリストの復活、4部の信仰告白の複雑なフーガへと続きます。まさにこの曲一番の難所であり、聞かせどころです。

## IV. サンクトゥス ベネディクトゥス

神への感謝の歌が静かで透明なコーラスで始まり、アレグロ・ニ長調で「オザンナ（ばんざい）」の力強いフーガへと続きます。第2部の四重唱「ベネディクトゥス」はミサ曲ハ長調のなかでもとても美しい箇所、イエスを褒めたたえながら「オザンナ」の短いフーガで締めくくります。

## V. アニュス・デイ

「アニュス・デイ（神の子羊、世の罪を除きたもう主よ、我らをあわれみ、平安を与えたまえ）」と歌われる部分は重々しく開始されます。「ドナ・ノービス・パーチェム（我らに平安をあたえたまえ）」で明るくハ長調になり、「ミゼレーレ（憐れみたまえ）」もユニークでささやくような音楽で続きます。

コーダでは冒頭の「キリエ」の主題が回帰し、当時では考えられない大胆な構成です。